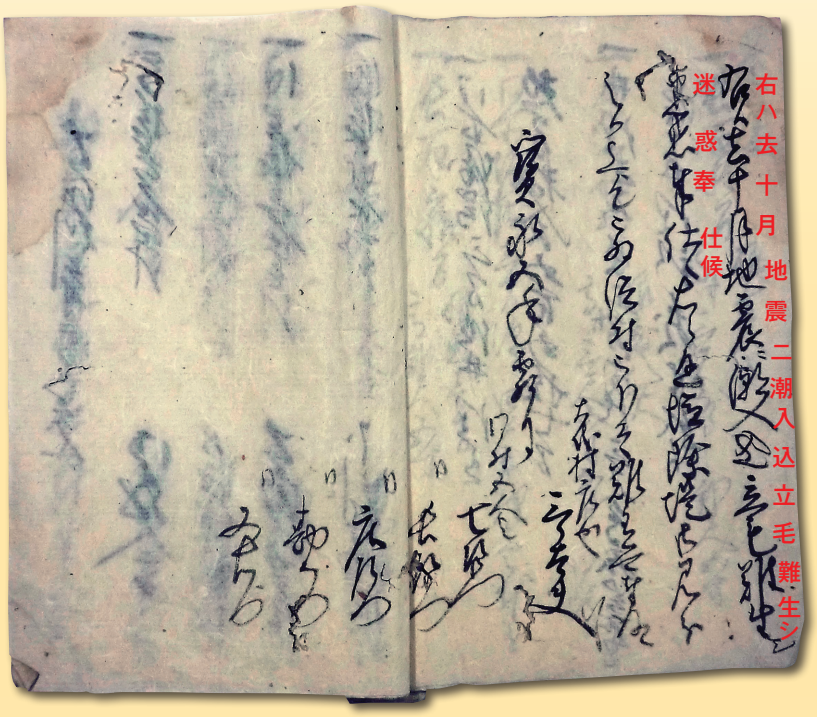
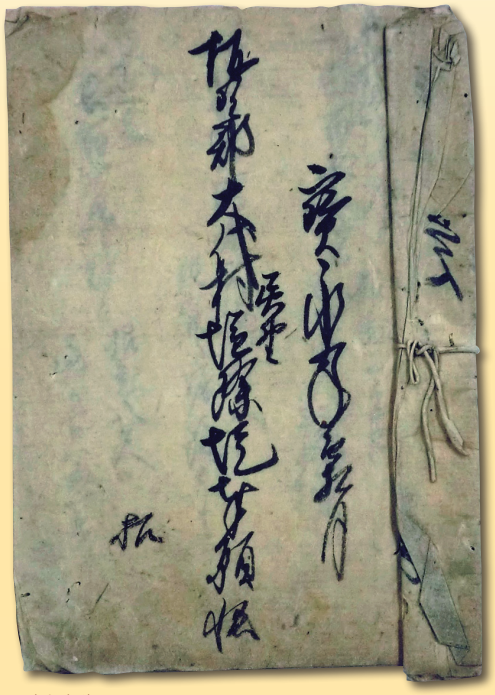
博物館ニュース No.97

徳島県立博物館 Museum News

― 300年前の巨大地震を伝える ―



宝永５年（1708）11月　板野郡大代村塩除堤奉願帳扣



（表紙）

宝永地震は、宝永４年（1707）10月に南海トラフ沿いで発生した、国内最大級の地震です。この地震の様子を伝える資料が、写真の古文書です。宝永５年11月に、板野郡大代村（現鳴門市大津町大代）の庄屋三郎太夫らによって作成されたもので、内容は「塩除堤」の設置に関するものです。「塩除堤」は、海水が陸地に入り込むのを防ぐための堤防です。大代村では、宝永地震の影響により海水が田畑に入り込み、作物があまり育たなかったことがわかります。今から約300年前に発生した宝永地震に関する古文書は少なく、その様子を伝える貴重な資料といえるでしょう。

（歴史担当：松永友和）

改良唐箕「島本式唐箕」

磯本　宏紀

唐箕は、人の力で風を起こして、収穫した米や麦、豆などに混じったゴミや殻を取りのぞく道具です。
今回は唐箕のなかでも改良唐箕の一種である「島本式唐箕」をテーマにします。これはどんな唐箕なのか、探ってみましょう。

島本式唐箕とは

写真１が、改良唐箕の一種である「島本式唐箕」です。この唐箕は徳島市八万町夷山で使われていたものを、当館に寄贈してもらったものです。それぞれの柱には「島本式唐箕」「徳島市八万町法花」「徳島農機工業謹製」、漏斗には「TOKUSIMA NOKI Co.LTD」「島本式」と書かれています。まず、「島本式唐箕」とあるのは、この唐箕の商標です。「徳島市八万町法花」とは製作地、「徳島農機工業謹製」というのは製作者です。つまり、徳島市八万町法花にある徳島農機工業が製作した「島本式」という商標の唐箕というのが、今回タイトルにした「島本式唐箕」の正体なのです。ちなみに、「島本」というのは、製作所の代表者名です。

写真１　島本式唐箕（当館蔵）

唐箕の改良と流通

古いものだと、江戸時代中期の紀年銘がある唐箕が現存していますが、島本式唐箕は比較的新しいタイプの唐箕です。昭和25年前後に開発され、製作、販売されるようになりました。同様に、各地で新しいタイプの唐箕が開発され、製作、販売されるようになりました。徳島県域では、「島本式」のほかに、「中山式」「齋藤式」

「日進式」「美馬式」といった唐箕があります。徳島市佐古の製作所が多いのですが、それ以外の地域のものもありました。

「島本式唐箕」のような唐箕は、それまでの唐箕に対して、改良唐箕、近代唐箕などと呼ばれます。その名のとおり「改良」を施されています。まず唐箕の横幅が小さくなり、そのことにより、1人でも運べるサイズになりました。次に、ハンドルと車軸をつなぐ部分にギアが装着されています。ハンドルを1回転させるうちに、内部の風車はおよそ3回転するように作られています。そして、穀物の落下やゴミの排出を調整するレバーが増えました。写真1の唐箕の場合、漏斗からの落下の調整、風量の調整、2つある樋口（ひぐち）の間の仕切り板、左端の吹き出し口の仕切り板がそれぞれレバーで調節できます。

こうして改良された唐箕は、売り方も以前とは変わりました。島本式唐箕の場合、自転車の荷台に見本の唐箕を積んで運び、各地の農協を巡って営業をしていました。現在の美波町や海陽町などの県南部、美馬市やつるぎ町、三好市など県西部、鳴門から海を渡って淡路島にまで売り歩いていたようです。そのためか、現在徳島県内各地の博物館・資料館等で唐箕として収蔵されることが多いのが、この「島本式唐箕」をはじめとする改良唐箕です。

製作所の系譜

島本式唐箕の製作所の系譜はどのようなものだったのでしょうか。唐箕には「徳島市八万町法花」と書かれていますが、実際に製作所があったのは徳島市八万町川南（かわみなみ）の写真2の付近です。この付近は昭和20年代には家が少なく、水田が広がっていた場所でした。そこに、昭和20年代から40年代頃には、現在の当主の先代らが兄弟で農機具の製作所をつくって経営していました。当時は、唐箕、乾燥機、脱穀機などの主力商品のほか、建具も製作していました。後に場所を移して発展し、現在はシャッターやサッシをつくる会社に変わっています。

徳島市八万町川南に製作所が移る以前、現在の当主の2代前（祖父）の時代ですが、写真2の場所に近い徳島市八万町の法花橋北岸付近に製作所がありました。やはり、唐箕、水車など農具を製作していたのですが、ほかに箪笥（たんす）も作っていたようです。さらに前の4代前の時代、島本家は現在の徳島市八万町へ移ってきたそうです。それ以前は現在の徳島市福島付近に住んでいて、船大工だったと伝えられています。ですから、船大工だった家系が、後に箪笥など家具製作にたずさわるようになり、さらに水車、唐箕などいわゆる車屋のような業種も兼ねるようになり、そこから転じて農機具製作、建具製作へと変わってきたということになります。

写真2　かつて島本式唐箕の製作所があった付近のようす（徳島市八万町川南）

徳島県域およびその周辺で流通した「島本式唐箕」は、動力式、複合式の農機具の登場により、現役を退きました。「島本式唐箕」を製作した側に注目してみると、農具の技術革新と流通の歴史を読み取ることができます。

（民俗担当）

館蔵品紹介

那賀郡富岡町吹田家文書

当館には、那賀郡富岡町吹田家文書と呼ばれる110点余の古文書が収蔵されています。那賀郡富岡町は、戦国時代に牛岐城を拠点に新開氏が同地一帯を治めた地域であり、現在の阿南市富岡町にあたります。

さて、近世の富岡町ですが、天正13年（1585）に蜂須賀家が阿波国を支配するようになると、蜂須賀家政の甥・細山帯刀（のち賀島政慶）が牛岐城に配置されます。その後、牛岐という地名は富岡と改名されます。江戸時代の富岡町は、阿波南方の政治・商業の中心地として栄え、町内に居を構えたのが吹田家です。

吹田家は、慶長年間（1596～1615）に紀伊国熊野浦から富岡町に移り住み、質屋や酒屋業などを営むかたわら（図１）、町年寄などをつとめるなど、富岡町を代表する町人といえます。徳島藩とも関わりがあり、藩に金銀を用立てる御銀主を命じられ、藩の財政の一部を支えるとともに、天明４年（1784）には自宅の敷地内に藩主らが宿泊・休憩するための本陣を建設しています（図２）。

また、明治６年（1873）時点における蔵書目録が残されており（図３）、蔵書の多さとともに当主の幅広い教養や知識の奥深さを感じさせます。弘化３年（1846）には、郷学校の暇修館（明治４年に富岡郷学校と改称）が創設されますが、その運営経費の一部を吹田家が補填をするなど、地域の教育振興にも尽力しました。

このように、吹田家文書からは家や地域の歴史をうかがい知ることができます。資料の調査研究や活用が進むことによって、地域の歴史がより一層豊かなものになればと思っています。

（歴史担当：松永友和）

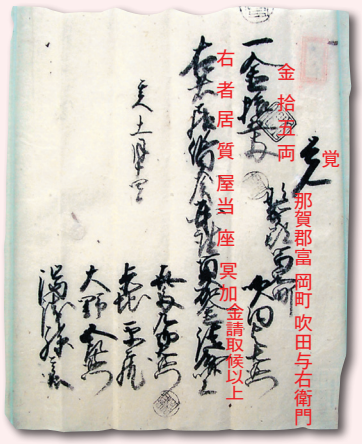


図１　吹田家が徳島藩に献上した冥加金の請取書。献金のかわりに、吹田家は質屋株の所持が許されています。江戸時代の質屋は、銀行が存在する現在とは異なり、地域金融を支える側面がありました。

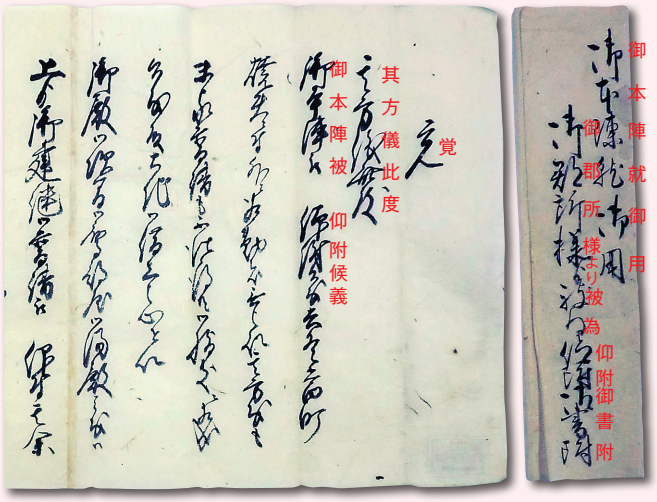


図２　藩の役人が、吹田家当主に差し出した古文書の冒頭部分。天明４年（1784）から吹田家が、本陣御用をつとめたことがわかります。

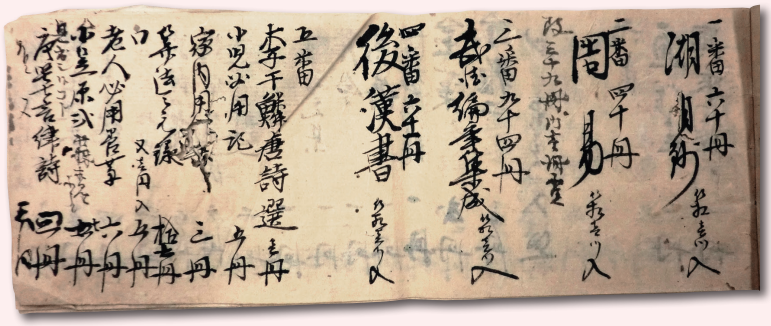


図３　吹田家が所持していた蔵書目録の冒頭部分。「周易」や「後漢書」などの中国の書物の他に、「武徳編年集成」（徳川家康の伝記）や「湖月抄」（「源氏物語」の注釈書）など、多くの書籍を所持していたことがわかります。

情報ボックス

毒棘を持つ魚 アカザ

川遊びをしていると時々石の下から赤っぽい小魚がくねくねと出てくることがあります。これは徳島県では「アカザシ」、「アカギギ」、「オイシャハン」などと呼ばれているナマズの仲間（ナマズ目アカザ科）のアカザという魚です。

ナマズの仲間なのでヒゲがあり上顎に２対、下顎に２対あります。本州と四国、九州の水のきれいな上流域から中流域の瀬やトロの岸ぎわでよくみられます。夜行性で日中は石の下にいますが、夜になると出てきて水生昆虫などを補食します。産卵期は初夏から夏にかけてで、ゼリー質におおわれた卵塊を瀬の石の下に産み付け、オスが保護します。

さて、日本の川魚で毒をもつ魚はほとんどいないのですが、この魚だけは明らかに背びれと胸びれに毒のある棘を持っています（同じナマズ目のギギ科も毒棘を持つといわれていますが、刺されたという話はほとんど聞きません）。棘は皮膚でおおわれており、一見すると棘があるようには見えないので要注意です。ちょっと触ったくらいでは刺されないのですが、魚をギュッと握ったりすると刺されます。ただし、痛みはそれほど強くはなく、チクチクした痛みで 30 分ほどでおさまるようです（和田、2004）。

アカザは毒魚ですが、環境がよくないと生息できない魚なので、現在では減少傾向にあります。

環境省のレッドリスト（2013）で絶滅危惧Ⅱ類、四国では高知県（2002）と愛媛県（2003）で絶滅危惧 IB 類、香川県（2004）で絶滅危惧Ⅰ類、そして徳島県（2014）で絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。四国内では徳島県が絶滅の危険度がもっとも低く、吉野川や勝浦川、那賀川、福井川、牟岐川、海部川などに広く分布します。ただし、海部川へは人が持ち込んだ可能性があります。

（動物担当：佐藤 陽一）

参考文献

和田康夫（2004）毒棘を持つ淡水魚．臨床皮膚科，58（5）：11-14.

図１　アカザの生息地（徳島市入田町、吉野川水系鮎喰川）

図２　アカザ（標準体長 63.2 mm、2014年8月20日、図１の場所で採集）

人々が元気に暮らしているバロメーター

山里に群生して咲くタンポポ

春になると、吉野川の土手ではタンポポが群生して咲いています。このタンポポはカンサイタンポポという種類です。自分だけでタネができるセイヨウタンポポのような外来タンポポやシロバナタンポポとは違い、カンサイタンポポは他の株がないとタネができません。そのため、群生して、一斉に花を咲かせます。

カンサイタンポポは、県内では広く分布していますが、西の方に行くにしたがって、また、標高の高い山中に行くにしたがって分布が少なくなってきます。当館では西日本一帯でタンポポの分布を調べる「タンポポ調査・西日本 2015」にあわせて、たくさんの方々に呼びかけて県内のタンポポの分布を調べています。

その調査で筆者もタンポポを探して各地を回ることがありますが、しばしば山の中にある集落で、群生して咲くカンサイタンポポを見かけることがあります。そこにたどり着くまでは、外来タンポポやシロバナタンポポが道ばたにぽつりぽつりと咲いているだけでした。そうした場所で共通しているのは、道ばたや畑の周辺がよく草刈りをされていることです。庭もよく手入れされており、桃や桜の花が咲いていたりして、桃源郷（とうげんきょう）に迷い込んだような錯覚を受けます。

徳島県三好郡東みよし町西庄地区のカンサイタンポポの群落

県内の山村では過疎化と高齢化が進み、地図には載っているものの、その集落に行ってみると人が住んでおらず、廃屋（はいおく）のみとなっている場合があります。そのような場所では一生懸命さがしてもタンポポは見つからず、かろうじて道ばたに残っていたタンポポも周りが背の高い草木に覆われて、風前の灯火（ともしび）となっているケースもありました。その地域で暮らす人々が草刈りなどの活動をすることによって、タンポポが咲く明るい草地が維持されています。

今までのタンポポ調査では、外来種と在来種の割合に注目して都市化の状況を記録してきました。一方で、山里にカンサイタンポポが群生して咲いていると、地域の人々が元気に暮らしているということがわかります。タンポポの分布を継続的に記録すると、そうしたバロメーターとして使うことができ、タンポポ調査の新たな視点として注目されています。ぜひ皆さんもタンポポ調査に参加してみてください。　（植物担当：小川　誠）

タンポポ調査・西日本 2015

調査期間：2015 年 3 月 1 日～ 5 月 31 日

詳しくはホームページをご覧ください。
http://www.gonhana.sakura.ne.jp/tanpopo2015/

愛媛県四国中央市のカンサイタンポポの群落

高知県長岡郡大豊町のカンサイタンポポの群落

トピックコーナーで展示した土器の年代は、どうやって決めたのですか？

博物館では、平成26年9月2日から10月26日までトピックコーナーで、図1のような海岸で漂着物として採集された土器・陶磁器を展示していました。

考古学者が遺物の年代を決める方法には、「放射性炭素同位体法」など理化学的な年代決定法もありますが、トピックコーナーで展示した資料の年代を決める際には、遺物の「質（種類）」と「形」に注目しました。今回展示した資料は、粘土を原料とした焼き物である、「土器」「須恵器（すえき）」「瓦（がき）器」「陶器」と、陶石（とうせき）を原料とした「磁器」の全部で５種類に分けることができます。これらの焼き物は、それぞれ日本で作られたり外国から輸入されたりするようになったのがいつからなのか、これまでの研究で明らかにされているので、焼き物の質を見ればだいたいどれくらいの時期よりも新しいものなのか、といったことは判断できます。

次に、器種（きしゅ）（遺物の用途による分類）や、具体的な時期を決めるために、注目するのは「形」です。たとえばここ10年間で携帯電話の形が変化してきたように、物の形は時代の流れによって徐々に変わっていきます。私たち考古学者は、遺跡で出土したいくつかの遺物を見比べて、まずは器種ごとに分類します。さらに、出土した地層との関係も考えながら、その器種の中で似ているものを順番に並べていきます。こうして作られるのが、図２のような「編年（へんねん）表」です。

図１の弥生土器の年代は、徳島や近畿の弥生土器の編年表と見比べて、時期を特定しました。考古資料の年代は、このような地道な作業の積み重ねによって明らかにされているのです。

（考古担当　岡本治代）

図１　小松海岸で採集された弥生土器長頸壺（弥生時代中期の終わりごろ）

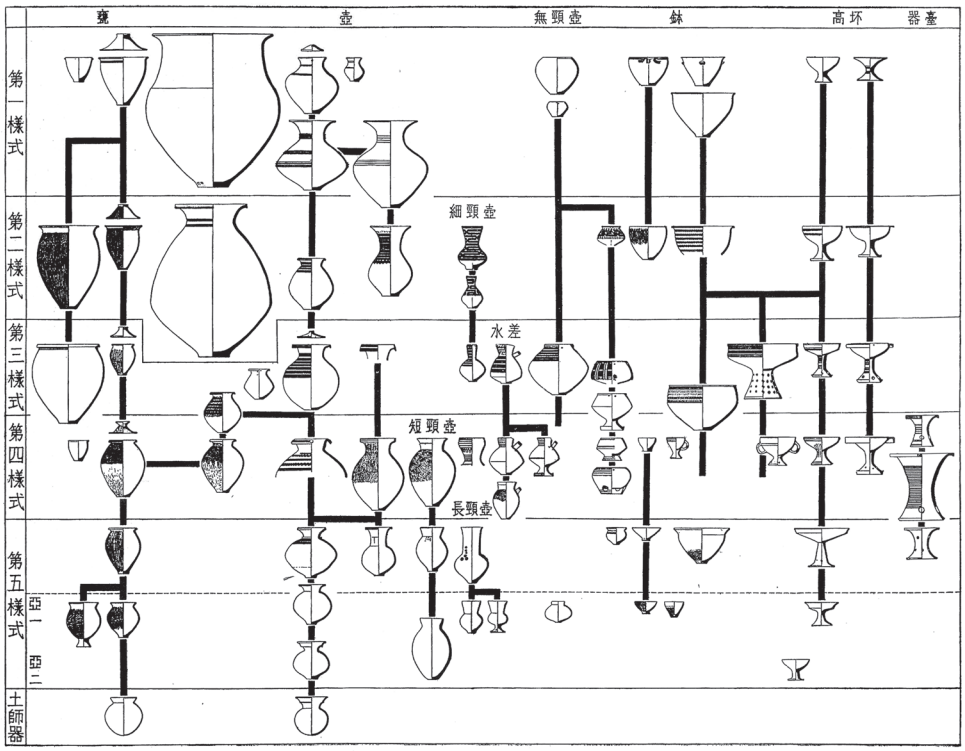


図２　奈良県唐古出土弥生土器編年表　奈良県唐古遺跡で作られた弥生土器の編年表。第Ⅰ様式から第Ⅴ様式の順に、器種の組み合わせや土器の型式が変化してきたことを示している（第Ⅰ様式が弥生時代前期、第Ⅱ様式から第Ⅳ様式が中期、第Ⅴ様式が後期）。徳島県内の弥生土器の編年も、このような畿内の土器編年を参考に作られている（挿図出典　京都帝国大学文学部考古学教室編 1943『大和唐古弥生式遺跡の研究』桑名文星堂：第66図）。

１月から３月までの博物館普及行事　あなたも参加してみませんか？

シリーズ名	行　事　名	実 施 日	実 施 時 間	申込	対 象（定 員）	備　考
歴 史 散 歩	鳴門の古墳見学	3月15日(日)	10:00 ～ 16:00	要	小学生から一般（30）	現地集合
野外生きものかんさつ	初めての植物かんさつ（新年編）	1月25日(日)	13:30 ～ 15:30	不要	一般（15）	
	初めての植物かんさつ（冬編）	2月22日(日)	13:30 ～ 15:30	不要	一般（15）	
ミクロの世界	電子顕微鏡で昆虫を見よう！②	3月　1日(日)	13:30 ～ 15:30	要	小学生から一般（10）	
たのしい地学体験教室	アンモナイト標本をつくろう	3月　8日(日)	13:30 ～ 15:30	要	小学生から一般（20）	材料費300円(大学生･一般)
ワクワクむかし体験	掛け軸・巻物にしたしもう	2月15日(日)	13:30 ～ 15:00	要	小学生から一般（30）	
ミュージアムトーク	土器製塩のはなし	1月18日(日)	13:30 ～ 15:00	不要	小学生から一般（50）	
	幕末の徳島	2月　1日(日)	13:30 ～ 15:00	不要	小学生から一般（50）	
部門展示関連行事	部門展示「藩絵師のすがお」展示解説	2月　8日(日)	14:00 ～ 14:30	不要	小学生から一般	観覧料必要
	部門展示「藩絵師のすがお」展示解説	3月22日(日)	14:00 ～ 14:30	不要	小学生から一般	観覧料必要
博物館スペシャル	ボランティア企画型イベント	2月11日(水)	9:30 ～ 16:00	不要	幼児から一般	

普及行事のお申し込みについて

◎１枚の往復はがきで､1行事のみ申し込むことができます。
◎行事日の **１カ月前から１０日前**までに、必着で右記までお申し込みください。
◎返信用はがきの住所･氏名も忘れずに記入してください。
◎希望者が多数の場合は抽選とし、詳細は当選された方にお知らせします。
◎原則として、参加費は無料です。

往復はがきの記入例

〈往信の表面〉	〈返信の裏面〉	〈返信の表面〉	〈往信の裏面〉
52 〒770-8070 往信 徳島市八万町 向寺山 徳島県立博物館	何も書かないでください	52 〒□□□-□□□□ 返信 あなたの 郵便番号 住所 氏名	1. 参加希望の行事名 2. 参加希望者全員名(学年) 3. 住所 4. 電話番号

※お問い合わせは、徳島県立博物館へ（電話 088－668-3636）

博物館ボランティア企画型イベント

● 日時：2015 年 **2** 月 **11** 日（水・祝）
● 会場：博物館常設展示室（２階）※参加無料

博物館ボランティアスタッフが中心になって、視覚障がい者、聴覚障がい者、外国人、幼児、高齢者など、誰もが楽しく利用できるキットなどを使ってイベントを行います。多数の方のご来館をおまちしております。

昨年の様子

もよおし物（予定）
○クイズラリー　○体験型のもよおしもの

博物館友の会行事のご紹介

2014 年７月、友の会行事「キャンプで自然体験」を行いました。
会員 29 名が参加し、有意義な活動となりました。

〈活動場所〉
徳島県立佐那河内　いきものふれあいの里キャンプ場
〈活動内容〉
○動植物の観察　○昆虫のライトトラップ　○旭ヶ丸登山

2014 年度の今後の行事予定

２月１日（日）こんにゃく作り（博物館実習室）
２月（日は未定）大敷網体験（海陽町鞆浦漁協）

「キャンプで自然体験」の活動の様子

お問い合わせは、
友の会事務局まで（電話 088-668-3636）

■発行年月日　2014 年 12 月 1 日
■編集・発行　徳島県立博物館　〒770-8070　徳島市八万町向寺山　TEL088-668-3636　FAX088-668-7197
http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp